

# 小田原史談

第118号

発行所 小田原史談会  
小田原市南町2-3-21

## 北村透谷家譜の探究

(3)

中野 敬次郎

四北村家二代目医師玄快に  
ついて

北村透谷の祖父が小田原藩医の玄快という人物であったことは知られているが、この度の調査でもう一人玄快という人がいたことがわかった。まづここに述べる玄快はそのもう一人の玄快で、つまり北村家二代目医師玄快で、透谷の祖父で知られている北村玄快は五代目医師であった。

北村家初代医師玄塊が世を去って、その子玄快が二代目医師としてその跡目を継いだのであるが、実はこの人にはその出生について疑問がある。

前章において私は、初代玄塊の男の子として寿杉、玄快の二人のあることを一応述べたが、そこでも一言触れておいたように、異名同人で、寿杉が後に玄

快と改名したものであるのかという疑問をあげておいたが、もう一つの疑問は玄快は玄塊の実子ではなくて養子ではないかという点にある。

後に明治十二年に北村透谷の実弟の垣穂が、丸山家の養子に入りて同家の家督をついだが、その「丸山家過去帳」の中に、北村、丸山の二家はともに代々医師で、周防(山口県)大内家の出身であることを述べて両家の關係を

「北村氏于時絶焉。丸山家建是。丸山氏于時絶。北村氏建之。二家二面一也。後世末代記之」

「北村絶。丸山建之。丸山三清之子是也。丸山絶。北村建之。北村垣穂是也。」

とあって、北村、丸山両家の血縁關係が深いことがわかる。

かり、北村家の男子が絶えたときに、丸山三清の子が入って養子となって北村家を継いだことを述べているがその丸山家から養子に入っただけは北村家と言う誰なのだろうか。

丸山三清の歿年は安永五年(一七九〇)一月十七日であるから、その点から考えると二代玄快が三清の子で北村家に養子に入った人物とするのが妥当であるように思う。

さてまた、北村家墓地の中に初代玄塊夫妻の墓石があつて、それに

「海翁円庵庵主 各靈 寛政十二庚申四月十七日  
実如貞呼信女 安永六丁酉十月二十六日  
施主 北村寿杉立之

と刻されてあることは前章ですでに述べておき、「実如貞呼信女」は玄塊の後妻であること、そして玄塊が持った三人の妻のうち二度目の妻であるから、その

「実如」は寿杉の実母であつて、北村寿杉という当主が、先代当主で、父母にあ

たる兩人の墓石を建立したものであろうと推定しておいた。

ところが、寿杉という人物については、この墓石の建立者として名をあらわすのみで他の資料に一切名があらわれず、謚号も歿年月日もわからないので、本来杉山家で誕生した人でないこと、杉山家の当主になつてからまもなく改名した人であらうと推定すべきであると思われる。

そこで諸種の点を総合して考えると、寿杉は恐らく丸山三清の子で玄塊に男の子がなかったので養子として北村家に入つて二代目医師となつたが、間もなく養父の名にあやかつて、寿杉を改めて玄快となつたのであるということになる。

さて、二代目玄快については、その妻子は「長泉寺過去帳」に

「○大通院福岩智勝大姉。天保十二年六月三日。玄快妻。

○玉雄童子。文化五年二月二十八日。玄快悖。

○凍心院医山妙器居士。天保二年十二月八日。玄快悖玄碩コト」

子」が幼少で歿したので、家督の医師は次男の玄碩が継いだのである。

(四)三代北村玄碩と四代北村見順  
北村家三代目医師となつたのは二代玄快の次男の玄碩であったが、この人は早く死亡したので、玄快は後に養子見順を迎えたのである。

玄碩は天保二年(一八三二)に死亡しているが、それは父玄快(天保十二年一月十七日歿)に先立つこと十年も早いので、家督を相続しなかつたのではないかと考える向もあるようだが、北村家の墓地には

「醫山妙器上座靈。天保二卯十二月八日死。」と刻した単独の墓石もあるし「北村家先祖位牌」にも「長泉寺過去帳」にも載っている

また醫山妙器居士(又は上座)の謚号からすると、医師として相当の手腕のあった人物であつたことが知られるし、それに父の玄快が相当長寿の人であつたようであるから、父より十年前に歿したとしてもそんなに早死でない訳だから、当然一代に数えるべきである。

しかし墓石も見ても「過去帳」にも「先祖位牌」にも玄碩の妻や子の名が見えないから、一代には数えるべきだが、結婚せずに終つ

たようで、やはり若死であつたようである。そこで養子に迎えたのが見順である玄碩について今一言しておきたいのは「天保十年小田原藩分限帳」に「村山玄碩高六十石」とあるのは、同名異人であつて小田原藩の医家村山氏の玄碩で、北村家の玄碩ではない。

北村家の玄碩は天保十年にはもうこの世にはいない。さて北村見順については彼の独立墓石は北村家墓地には見当たらないが、「長泉寺過去帳」に「権孝院憤心義順居士。天保九年十月二十一日。見順コト」とあるのがこの人である。

「北村家位牌」中にも謚名が見えている。

ところが、玄碩の場合には「長泉寺過去帳」に、謚名の下に「玄快悖」との註記が見えるが、見順の場合は何んとも記していないから、玄快の妻子でないことを意味しているようであり、また彼の謚名の

「権孝院憤心義順居士」というのは、如何にも微妙な称号で、字句からして彼が養子で、養父母に対して孝養をつくした人物であることを示している。

の名が見えて、「父見順が亡くなったので玄快(筆者註、五代目)が天保十年に跡をついだ」ことが記されてあるの、見順も一応北村家の当主となった人であった。これを医家北村家四代目とする。

しかし、この人も養父玄快に先立って天保九年(一八三七)十月二十一日に歿したので、彼もまた結婚前で妻子がなかった。  
北村家では更に養子を迎えた。この人が養父の名をそのままついでまた玄快と名乗った。五代目碩快がこの人で作家北村透谷の祖父に

# 粹翰長早川の先陣

川瀬 速雄

たしか四十年の八月であった。翰長が環翠楼滞留中のこと、箱根山の界限稀有の豪雨に襲はれた。降り頻る雨に早川の水は驚くべき勢を以て増し来り、沿川の湯楼や山荘は危険刻々に迫り、人心恟々安きものなく只管避難の準備に忙殺するものゝみであった。当時翰長は楼の最下層の河に臨める部屋に陣取って居たが、猛り立った奔流は巖石を攘ひ、護岸を呑むやうに洗去

当る人である。  
さて、二代目玄快はこのようにして妻子玄碩にも養子見順にも先立たれ、老の身をかこちつつ天保十二年正月十七日世を去って、「縁応院随法支器居士」と謚名された。三代目玄快は前述のように子供としては男子は二名(玄碩と玉雄童子)あったが、女の子は他家に嫁ついたので何人かは不明であるが、末娘にすみと、その小さな墓石があるのを北村家墓地で見つけた

翌日になると大森方面も大洪水であるとの電報が翰長の許に来た。此の電報には流石の翰長も驚かずには居れなかった。当時翰長の愛児達は皆避暑乍ら森ヶ崎の別荘に滞在して居られ、其の率領兼ねての随伴が、当年十九歳の書生であったので、其の安否が非常に心痛となったのであるが、此の電報が最後で其の後の消息全く杜絶となった。焼野の雉子、夜の鶴、翰長の不安は愈々高まり、婦心矢の如くなるが、湘南を去りて京に帰るは容易でない。乙女峠を越えて御殿場に出る道を探らんか、乙女峠まで行くにはどうしても早川の左岸に渡らねばならぬ。其の早川は眼の前に阿修羅のやうに荒狂うて居る、所詮是は断念める外ない。箱根の旧街道に求めんか、三島に出なければならぬ、兩うすれば箱根の隧道は崩壊して汽車が不通だとあるから亦駄目である。結局甲州路に依らねばならぬことになるが、是も果して安全なるや否や急には判然と知る術がない。第二は元箱根から熱海に出で、海路東京に往くのであるが、険しい十二里余の山路は徒歩路である。此の場合足れしきの事は平素の健脚を試むるに於ては何んかあらんであるが

海は暴れて怒濤尚斂らず、定期航海絶望との報告もある。斯く詮じ来れば万事窮すの境遇にあるのだ。翰長更に思ふ所あり、帰東の方法としては唯早川を左岸に渡るの途を講ずるより外は焦眉の急に立つものがない。然るに早川も玉の緒橋の辺は川幅僅に十五六間に過ぎないが、水勢非常に急、百雷の空を走るが如く其響轟々耳を聳するばかり、荒れ狂へる状一見悚然たらざるを得ぬ、対岸との言語さへ通らぬので障子に要領を書いて辛じて通信を交換すると云う有様である。窮すれば通ず、工夫の末は、三日目にやっと電線を対岸に渡すことに成功したのである。塔ノ沢では前夜より粥すら啜ることの出来ない程苦境に陥つて居る宿もあつた。そこで電線が架渡されると、取敢ず米一俵を之によりて送らうとしたが、何事ぞ電線の力は其重さに耐え得ないで、折角の米は河半程に届かぬうち河中に墜落して了つた。電線を架せるは成功なるも是に至っては好結果を得なかつた、これには始から判つて居る仔細がある、電線を二条にも三条にするは平常なれば容易なるも、此の場合僅かに電線が一条渡すに足る丈け外なかつたのである。断れ

た此の日の困難に陥いつた事は譬ふるにもない有様であつた。すると、この様子を覗いていた翰長は、通信用の架空の電線が電柱から離れて地に逸つて居るのを見出し、之を以て直ちに架んべしと言出した。然るに皆翰長の命を訝かつて、それは通信の公器といふ考が誰の頭にもある、手を触れば嚴罰に処せられるだらうとは誰も考へたからである。翰長は励声叱咤した、やはり皆が手を着けかねている。会々一人の警官が其処に合せて。翰長は之に向つて懇々事理を説き此の場合臨機の処分に出ん事を訴へた。警察官も一時は躊躇したが何と言つても幾百千人の饑餓を救ふ応急措置としては此外に途がないから、終に翰長に同意し、佩いていた刀を抜いて自ら之を切断しそれで漸と二条の電線を対岸に架渡すことが出来て米味噌薪杯が続々運ばれる様になつた。塔ノ沢の客や宿主は勿論其他の諸人が翰長を救世主とも拝したのであつた。翰長は際どいところで多くの生霊を救つた訳である。然し斯うして命の綱の物資は自由に運ばれる様になつたが、まだ人々は前米俵墜落の恐ろしき経験に物怖して、誰一人この電線によつて渡らうとする者

が居ない。気が気でない翰長は、千鈞の身をも顧みず身を挺して奮に飛び乗り、自分を運べと言出した。人夫達は悚れ愕き良々躊躇の体、警官は諫止する。併し翰長は「僕には天佑があるから安神し玉へ。」と言ふや否や乱暴にも牽け——と合図した。そこで対岸の連中は力を揃へて綱を引き出す、やがて翰長の身体は宙を飛んで難なく対岸に届く。其時は実に翰長は体には神祕の宿れる乎を疑はしめた与一の矢ではないが、首尾よく対岸に達するや拍手の声は暫時水を挟んで、兩岸に鳴りも止まなかつた。  
当時宮ノ下で避暑中の細川護成侯、恰度洪水見物に来ていて、此の壮絶なる翰長先渡の光景を早速「キヤメラ」に収めて絶好な記念と為られた。斯うして翰長に依つて、早川の渡行は始めて不自由ながらも開くるに至つた。蓋し此の界限の人達には粹翰長の名によつて翰長を知らざるは莫かりしも更に救命の親として翰長の名は一層名高くなつた。

続いて翰長は尚も非常の危険を冒して舟で酒匂の奔流を横断し、京浜間の水害修繕工事後試運転とも云うべき第一の列車に乗るなどして幾度か危地を踏み無事

帰京が出来た。森ヶ崎の別荘に居た愛児達は前日救命艇に救はれて一同官邸に帰って居ったので、此の無恙

の貌に触れたとき輸長の安心千萬無量であったことを察する。

### 誤字のお詫び

一一七号の箱根環翠楼の笑話、風流小田原の街歌の作者名を川瀬春雄様としてありましたが編集者の誤り

で川瀬速雄様の作でしたので御訂正願ひます。川瀬速雄様に心から御詫び申し上げます。 杉崎

## 自叙伝

### 青少年時代

寿昌寺住職 荻窪長生会長 荻窪保育園長

### 大井諦玄

筆者生誕(明治三十五年五月五日)より大正七年(一九一九)三月三十日十七歳迄

筆生誕(明治三十五年五月五日)より大正七年(一九一九)三月三十日十七歳迄

旧姓守本で秦野市鶴巻一八六番地極楽寺住職守本玄道を父とし守本みきを母として生れた、役場の届けは九月七日になっている どうゆうわけがあったかまさか忘れたこともあるまい

孝父(死亡した父)玄道は仏教学禅学乃至漢学に堪能だったので九は数の極整であるし七も目出度い数だから九月七日にしたかもしれない。僕の実兄玄底は、生れる前に生れたことにならしい、五才で入学したらしい、兄は随分苦勞したらしい、兄が生れた時孝父は五十五才、一年でも早く社会人にしたい一念から無理したのかも知れない、子供はいい迷惑、昔は母子手帳があるわけでない、産婆さんだつて仲々頼めない、

経済的にも時間的にも、秦野市鶴巻(昔の中郡大根村落幡)に露木豊吉さん(笛が上手だから通称笛豊さんとうゆう)とうゆうきような、おちさんが、安い賃金で、産婆さんを、もぐりてやったらしい、誰が僕等にうぶ湯をつかわしたかさだかでない、役場の届も凡そ想像出来る、出鱈目なもの、兄の小学校の受持ちの先生が「この子は年が違つて居るではないか」とゆつたそう

僕が父から可愛がられた母が縫つて呉れた黒染の麻の法衣(すそは赤)を着て五才の時から檀家の法要にお伴をしたものだ、寒い時など父が襖手をして暖めて置いて「諦ちゃん手を出せ暖めてやろう」といつて、かわるがわる左にいつたり右にいつたりして暖めて貰つたものだ、それは手を通じて父の愛が私の心の奥底まで通じたことを今でも忘れない、僕は現在荻窪保育園の園長であるが保母に朝登園して初めて園児に会った時「おはよう」と言葉だけでなく出来るだけ手で頭なり肩なりに振れて挨拶し

で欲しいと強要して居ります。それは前述の父と私の関係のように愛のぬくもりが相手に通ずると信じて居ります。

話が前にもどりますがお経が始まると斜下に坐つて手を合せ、ちゃんと坐ることが大変だ、然しあ経が終ると、いよ／＼御馳走の段になると、楽しいものだ

前夜祭にはうどん・そばであるが、翌日はそれぞれ家によって色々な御馳走が出る、文字一字も知らない私に舍利礼文や般若心経を教えたものだ、教える方も努力だが、教えられる方も容易でない、根気と根気の戦

だ。 日蓮上人(一二二二〜一二八二)が「大夫に月なく日なくば、草木いかにか生ずべき、人に父母あり一人もかけば子息等をだちがたし」と述べられている、さもありなん。

鶴巻北端に大椿とゆう七軒ばかりの部落がある、或日の夕方、その中の旧家が丸焼の大火があつた。大きくなつて聞くと私と同年の某氏が猫が子を産んだのを灯で見に行つた時誤つて藁に燃え移つて大火となつたとか、子供の監督は怠るといふでもないことになる。

生家極楽寺本堂に間口十間奥行八間の普通田舎の本堂で、左側に十一面觀世音菩薩が祀つてあつた、前机に木蓮、香炉、燭台等具

足が整備され、前に紗のかかった見台があつた、私が三才の時燐寸をすつて、赤い火を見て蚯蚓を連想して蚯蚓／＼と云つて竝べては嬉んで遂に紗に燃え移り見台が黒煙を立てて真火に燃え上つてしまつた、すでに大事に至る処を母が用事あつて本堂へ来たので母が大

声で何んと云うたか覚えて居らないが、あわてて消したのでよかつた。子供は由断は禁物、無邪気だが恐いものだと今更ながら思い出されます。

つたから無理はない。  
校長は小泉村蔵先生で伊勢原市三之宮(比々多村)から約八キロを徒歩で通勤して居られ自転車には乗れない、私が三年生の頃だと思いが職員室の入口に新品の自転車があった校長先生の自乗車があった校長先生が放課後生徒が帰宅した後運動場で練習されたが仲々上手になれない数日後上手に乗れるやうになられ遂に自転車通勤された、実直な先生で崇敬的であった、自転車に上手に乗れない時、車を避ける為電柱に当って負傷されたこともあった。

大根小学校は六百人人位の生徒で比々多小学校より稍少なかつた、運動会は一年の時と高等二年の二回だけ、即席の習字図画、唱歌や簡単なお芝居をする学芸会は一年の時一回だけだつた、それでよいと思つて居たからつまらないとも、淋しいとも思はなかつた。遠足に海と汽車を見に平塚まで徒歩で行つたこともあった。海の大きなのは驚いた、見渡す限り水、水、水と空がながつて居る、波が大きな音を立てて押し寄せて来る、引いて行く、又後から来る、はだしになつて波打ちぎはで、山を作つたり、トンネルを作つたりすると、去つていってしま

う、それが面白くて、何時間でもあきない、弁当は鮭に卵子、母さんが特別に麦を入れないでお米の御飯、おいしくて、食べてしまつて居りました。汽車を出て見えた、ピストンが出た入つたり、忙しいこと、煙突からモク／＼と出る煙の珍しい楽しいものばかり時間たつとも打ち忘れ、みとれて居ると先生が集れる号令、人員点検全員異状なく、平塚を後にして我が家に向つた、大層疲れて足がいたかつた。

私は一年生の時、風邪を引いて一日休んだ、二年から六年迄一日も休まなかつた、六年間精勤一年の時はずいぶん真田の菓子屋の牛村高三君が一番私が二番、六年まで四番以下にはならなかつた牛村君にはどうしても勝てなかつた。

真田、落幡、北矢名、宿矢名が一つのクラス、大槻南矢名が二クラス、各四十五名位、私は六年間三枚の免状を貰うのが嬉しかつた一年生の時は精勤賞、修了証、優等賞、他の学年は皆勲賞、修了証、優等賞、家へ帰ると鼻高か／＼

父は僕の記憶では健康であつた日は一日もなかつた小学校一年の頃杖をついてお伴に私をつれて檀家の法事に行つたものだ、帰つて来ると急いで就寝した、関節神経痛で足の関節が痛んで起居が不自由、初是一本杖で外も室内も歩いたが、日が立つにつれて二本杖で歩かれた。二本杖の時はまだよいが、それもかなわずハイ／＼で移動する様になると大変、特に入浴の時なぞ坐布団五枚位並べてその上をハイ／＼させる、寝室から浴場迄は二十間位ある浴槽(木製の円い桶)の外と内に台を置いて二人(姉と私)で入浴させる洗う、着物を着せる。

父は一度も私を叱つた事はなかつた、けれど何となつて笑顔を見せなかつた。奥の十二畳間にいつも一人で寝て居る、学校から帰ると重い杉戸を開けて風呂敷(当時はカバンなぞない)学用品を入れて通学した)を下し「オッチャン(父の呼び名)只今」と云うてチヤンと坐つて挨拶した、学校へ行く時も「行って参ります」と必ずやつたものだ。毎日一度はお経を教つた父は寝て居て般若心教、大悲心陀羅尼、舎利礼文等々教えた、時には漢文も教え、漢文と云うても論語、日本外史だけ、日本外史もいつも平氏だ、今思うと一向に進まない十才前後の小僧無理はない、今でもそれで覚えて居る、即ち平氏は桓武天皇より出ず天皇夫人多治比莫宗四子を生む、長を葛原親王と曰う……云云三頁位はそらじて云える。小学校四五年だから漢字は学校で習つただけ勿論漢文などはチンブン、カンブン、それをそらんじる迄教える、その根気、努力、教える方も習う方もたいたいの、六十年前の文を回想すると涙が出る、有り難いこと、こんな親は今時鐘と太鼓でさがしてもあるまい。

大正二年私が十二才小学校五年生の時下落幡(今の鶴巻II秦野市)宮川理三郎のお父さんが死亡した父は病気で出られない、今迄は檀家に仏事があると比々多村(伊勢原市)二キロばかり離れた所から人力車を頼んで法要を勤めたものだ、父はもう人力車にも乗れない真田(今の平塚市)の天徳寺、大槻(秦野市)の光西寺、南矢名(秦野市)の龍法寺の方丈様を訪問しても皆都合悪くて来て呉れない父も施主宮川氏も困り果て父が「諦ちゃんお前一人で行って呉れ」と、五年生の小僧が親戚や近所の者が沢山居る中へ一人で麻の黒の衣を着て、下には白衣を着て、それには相当の覚悟

巻、修証儀、陀羅尼願等沢山の御経を集めた経本)の普門品の隅の所を開こうと思っても、どこにあるか、あせればあせる程みつからない、お経はぐる／＼廻りいつまで読んでも終りにならない、でも漸くして普門品の隅が見付かった、私は汗ダク／＼随分苦しかった

東京都世田ヶ谷区三宿に世田ヶ谷中學校(現在世田ヶ谷高等學校)、私の母校(自叙伝中時代の項に記載)でもあり孫大井俊章の母校、現在孫二男大井友海在学中である。この中學校に私の実兄玄底は在学中であるから僕が檀家の法事は勤めなければならぬ。然し父の病氣は、日が立つにつれ大正四年私が十四才、高等科一年(当時尋常小學校六ヶ年、高等小學校二ヶ年)父は七十二才のお正月前後から大小便はおむつでとらねばならなくなった。六月下旬母を枕下によんで「涅槃衣(僧侶が死亡した時に着るころも)を作りたいで白の反物二反買つて来て呉れ、そしてお前衣を縫つて呉れ」と云うた、母は涙ながら伊勢原の伏見屋呉服店で右の反物を求め早速縫い初めた。

又父が母に籠箱を作りたいが、父が母を呼んで来て呉れ早く頼むと致命、早速母は

門倉徳次郎と云う大工さんと呼んで来た、父曰く「俺は死期が近くなつた籠箱を作つて貰いたい、五分板で検の材料そして二重蓋(底まで届く蓋釘は一本も使はないが組み立て式、前は観音開きにし顔が見える様にガラスを入れてお呉れ若し生き永らえて居たら、四方上下をはずして包んで天井にでも上げて置いて呉れ。側に居た母に「東京世田ヶ谷中學校は一学期の試験だから兄玄底には俺が死んでも通知するな件が来て俺が生きかえるものでもない、それより試験が大切だ」

遂に大正四年七月五日午後十時に遷化(僧侶が死亡すること)で此世で多くの人々を化度して更に死亡して彼の世へ行って衆生を化度すること、死亡することを化を遷す即ち遷化とゆう)した、慈孝父七十二才私は高一十四才であった。七月八日琴式導師は本寺真田天徳寺住職三浦玄保大方便来て呉れた寺院は比々多の保国寺、養国院勝興寺、万松寺、福昌院、大根の光西寺、龍法寺、自興院の諸老師で誠に簡素な寺院葬儀であった七十年も前のこと無理もない。

当時小學校特に大根小學校の諸行事は誠に簡素簡素

で八ヶ年在学中芸会(文化祭)は一回だけ、運動会は二回(尋一と高二)あったのみ、二回目の運動会は大正四年の秋だった。比々多、金目、曾屋の各小學校の先生が生徒を引率して見学して呉れた。出演種目中高二女生徒の荒城の月の御遊戯は非常によかつた、全員袴に白帯のいでたち、指揮は比々多から通動して居られた飯塚と云う女の先生で勇壮中にも悲哀、一段の感激を与えた、男生徒は(高一高二)日本海々戦で荷車に裝飾して軍艦を造り、大砲は紙、木銃を持った兵隊を軍艦の前左右に配置し甲艦、乙艦相対し、生徒が持つ小銃の玉は、子供が物するかんしゃく玉、賑やかとゆうより 勇壮!! 見物人の歓声ものすごく、拍手の雨、雨。他の出演は例の如く、マラソン、猫かぶり、二人三脚等々 私は数人で新聞班、種目に応じ其の都度印刷ぶりの新聞、肩から鈴を下げてチャリンチャリン／＼鳴し乍ら号外々外と威勢よく見物人に配布する。高二の生徒は秦野の稲本本屋から大太鼓小太鼓を借りて来て十日も前から先生の指導で練習をして、当日はテントを張つた特別席で楽隊をしたものだ。校長小泉先生は学級担任

をされ私等高一高二の受持今考えるとよくクラスの担任をされたものと驚かざるを得ない、校長としての交際、役場との連絡、職員統括指導等々、その努力精進は大層なものだと感激しました、而も片道十キロの道を徒歩で通動されたとは、自転車でも容易でないのに。

私には兄が居るが世田ヶ谷中學校(現在世田ヶ谷高等學校の前身)に在学中、姉は東京慈眼寺に行儀見習として奉公、だから僕と母の二人だけで留守をして居る。隣の佐藤春雄君は金目平塚市)育英學校(秦野高學校の前身)に自転車通学する、自分は百姓しながら母と二人で檀家を守り寺を守り近隣寺院との交際、何となく淋しかった。前述の通り父は大正四年七月に遷化、兄は在学中住職の無資格加うるに小僧、誰か兼務住職にならねばならない、極楽寺の法類総代である大槻の光西寺住職室端義忠老師に依頼し決定した。檀家に依り頼み決定した。檀家も離れた光西寺に行つて頼み、来て頂き伴僧を勤める。畑を三段歩もやつて大根、薩摩いも、人參其の他の野菜を作る、仲々多忙本堂の南にはちく敷(元はちくが)があった、それが枯れ

てはちくやぶと云つて居た)五畝を三時頃耕し終る程達者だった。又極楽寺には手間と云うて都合のよい日に一ヶ月四日乃至五日仕事に来る、野菜を作つたり薪を拵えたり正月やお盆には御伴をする。

檀家では八月十三日午前中から棚を造り上に莫座(いぐさの茎であんだしきも)を敷き四方は笹を立て前正面に縄を張り、それに栗の実、稲、大豆、里芋、等を下げ、正面に先祖の位牌を並べ、線香立、ロソク立、浄水等を供へ又水のこ(人參大根等を二センチ位の立方体に切り、白米をといで入れ、みそはぎを添へて置く)を造つて置く、各自の墓にお参をして先祖を迎える。エジプトのピラミットの形をした角錐状のもの一ヶを造つて、十三日から三日間夕方に迎火とゆうて、麦藁を燃して先祖の御精霊を迎える。

十四日十五日の二日間に菩提の方丈又はお小僧が、棚経に巡る、五十戸位ならよいが二百戸も巡るのは容易でない、二日目には膝がいたくて声はかかれず仲々の行事、特に昔は秦野方面では煙草を三メートル位の繩に葉をさし之を座敷につるし、その奥の床に御精霊が祀つてある、御精霊も

いゝ迷惑、お坊さんは其処でお経を読んで御供養する家の者がお坊さんが来られた、折角だからお茶でもと言つてくど(かまど)で火をたく、只でさえ暑いのに熱氣と煙、お坊さんは汗ビッシュヨリ、汗ダク／＼

煙草を作らない農家はかきをやると蚤はつきもの今の者は蚤を知らないでしようが、昆虫で足が六本で後足の二本が強大でよく飛ぶ、白衣に蚤が歩いて居るのが見える、読経中追うわけにもならない、かゆく／＼然しジツトこらえるよ仕様がなない。

八時頃真暗になって今日一日は終りとして門前に到着するや、ころも白衣を脱ぎ、真裸となつて、衣類をふるつて蚤を一匹も家に持ち帰らない様努める始末、当時は消毒薬、旋風器はなし暑さ蚤との戦、棚経は仲々の苦闘、普通の方は恐らく理解出来ないでしょう、私は一日に六十戸歩くのは容易でなかつた。

私の同級生の中には鎌倉の師範學校へ、金目の育英學校、平塚の農學校へ入学者者が居つたが、私は母と二人きり、寺の雑事に追はれ向学の志は人一倍あるが、どう仕様もない、通信講義録で勉強することにした、學校で習う三倍も四倍

の努力と時間がかかる、而も英語は全然駄目、第一発音、第二ヒアリング等々、先生は有難いといつく／＼身に沁み、学校へ入学出来ない青年の為に青年学校と言う夜学が小学校の校舎で小学校の先生が教えて呉れた課目は珠算と国語だけ、

一日も休まず通った。母にお願いして金目育英学校に大正八年四月から入学することになった。浪人生活は二ケ年でピリオドを打つことになり安心と喜びを言葉や文字で現すことは出来な

「私は今回はじめて小田原に参りまして、突然に私の父の墓がご当地の正恩寺という寺に存在することを中野先生からうかがって誠に驚いているところでございます」

彼は明治維新によって没落した父と共に幼少の頃から横浜に出て大へんな苦労をした。生きることに精いっぱいだった彼は、父の出自の詳しいことを全く知らずに遂に父を喪ってしまった。

「私の父は中野先生のご研究によりますと五石二人扶持の足軽だったそうでございますまして」

と彼は多分に謙謹と懐古の感慨をこめてこう語った以来私はこの五石二人扶持という言葉を忘れることが出来なくなった。

# 吉川英治記念館

高田 喜久三

今春行はれた小田原史談会の青梅地方史談探訪には青梅吉野郷に存在する吉川英治記念館見学が含まれていた。私はこの記念館をかねてから一度訪ねてみたいと思つて期待していたのだが、期待にたがはず閑寂でしかも詩情深く見学者の胸を強く打つものがあった。

吉川英治は小説家とは言つても、大正末期から昭和にかけて生きた人々にとつて忘れることの出来ない数々の思出を残してくれた人物である。特に彼の父が小田原藩の下級藩士であつたこと、しかもその事実は小田原史談会の中野敬次郎先生の研究によつてはじめ

戦前の昭和何年頃であつたらうか、朝日新聞に「宮本武蔵」を連載して好評を博し、急速に文名を高めた吉川英治を、小田原市が招いて、第一小学校（現在の本町小学校）の講堂で市民を前に講演会がひらかれた私とその時聴衆の一人として親しく彼の風貌を壇上に仰ぎ、彼の聲に接した。ところが壇下に立った彼の第一声は、この発見された父の墳墓のことであつた。

「新平家物語」「私本太平記」では確実に歴史小説の完成に成功した。

殊に「私本太平記」は敗戦によって一転した史観を十分に生かして、かつての逆賊足利尊氏を有能な政治家として描き出し、今までタブー視されていた南北朝時代の歴史の実情を描いて読者に深い感銘を与えた。

吉川英治は単なる一個の小説家にとどまらず、現代の良識を代表する人物としても私達に大きな影響を与えている。私の娘の結婚式の時、一人の来賓が祝辞の中で「菊根分けあとは自分の土で咲け」という俳句を引用して花嫁への戒めの言葉としてくれた。私は人生への箴言としてありがたく頂戴してそれ以来この句を忘れることがなかった。ところがこの句が吉川英治記念館に飾つてあるのを見てはじめて吉川英治の句であることを知り、彼を一層身近かに感じたのである。彼はこの句の外にもたくさん的人生訓を歌や俳句俳画にかいていて人生の達人であ

「私は今回はじめて小田原に参りまして、突然に私の父の墓がご当地の正恩寺という寺に存在することを中野先生からうかがって誠に驚いているところでございます」

彼は明治維新によって没落した父と共に幼少の頃から横浜に出て大へんな苦労をした。生きることに精いっぱいだった彼は、父の出自の詳しいことを全く知らずに遂に父を喪ってしまった。

「私の父は中野先生のご研究によりますと五石二人扶持の足軽だったそうでございますまして」

と彼は多分に謙謹と懐古の感慨をこめてこう語った以来私はこの五石二人扶持という言葉を忘れることが出来なくなった。

この当時、彼の「宮本武蔵」は映画にもなり、又徳川夢声の朗読でラヂオ放送もされて吉川英治の名は全国知らぬものはない。この講演会にも、水谷八重子、守田勘弥が同席して勸弥が「宮本武蔵」の一節を朗読したことを覚えていて

吉川英治の小説は、初期の「神州天馬映」から、昭和初期に発刊されて一般大衆に愛読された雑誌「キング」に載つた「剣難女難」「万華鏡」なども私は夢中

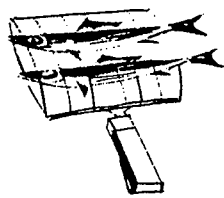
## 遺 偈

大井 諦 玄

（禪門）禪宗）僧侶は毎年正月に遺偈とゆうて、その時の心境を書き遺すことに

- (一) 臘尺寒窮 七十五年 山庵今夜 見白雲心
- (二) 搬柴運水 七十六年 我執法執 未得脱焉
- (三) 耕雲釣月人知否 七十七年夢一場
- (四) 將仏就仏 七十八年 灯油残処 昭壽昌辺
- (五) 如愚如魯 七十八年 命尺永訣 吾何語焉
- (六) 落花流水太茫茫 誰識眉毛何処去
- (七) 八十二年 右往左往 臭皮袋今 堪何用哉
- (八) 遷化処作麼生 壽昌月白雲清

からざるなり」とある作麼生は作と同じ生は接尾語、作麼生はどうして、どのように、どうしたなどと理由、状態、方法をいぶかつてゆう語



# 他市視察からの報告

佐倉 仁重

去る二月八日(水)に、小田原市教育委員会と市文化団体連絡協議会の共催による、伊東市視察が行われました。今回は、伊東市文化協会会員と、同市教育委員会職員との情報交換をした後

①首我兄弟の父河津三郎祐泰の菩提寺である東林寺  
②源頼朝と伊東祐親の娘八重姫との密会地であった音無神社  
③伊東一族の墓である最誓寺  
④暗殺された河津三郎祐泰の墓である血塚を見学したあと、小田原に帰って来ました。

# 井細田の道祖神

―風化した小正月の伝統行事―

星野 幸一

扇町旧道の中程に古風な消防団の小屋がありその右脇に道祖神が祭られている。もう一基は八幡神社沿いの道端に祭られているが何れも双体道祖神であり男女の神像がむつまじく寄りそう姿で彫られている。

右隣に切り石二段の上に切妻型の石祠があるが祠内には神像がなく全くの空間である。下井細田の道祖神は基壇が切り石一段で切妻型石祠の内部に双体像が彫られて居り同じ僧形であるが面相は風化が進んで目鼻だけがはっきりしていない。記年銘はなく上の道祖神より石造物全体が小さい。神像が祠内に彫られていてところをみると技巧的に上とは異なる石工の作ではなからうか。石祠の左側に

小さな五輪塔が奉祀され上部の宝珠(空輪)と請花(風輪)は長い年月の間に何処へか消失している。五輪塔はおそらく災厄にあった死者への供養塔であろう。自然現象のすべてが不解明であり天災や人災が神々の怒りと信じていた昔、人間は神の怒りをしらず喜ばせるために色々な祭を考えて災厄から免れようとした。富士山の爆発により宝永山が出来たのは一七〇七年(宝永四年)であり噴火による降灰やこれが原因となった酒匂川の氾濫、天明(一七八二―一七八七)天保(一八三三―一八三六)慶応、明治(一八六六―一七〇)期には三年から六年続きの冷夏となり収穫は皆無に近く飢きんによる餓死者が出たり、悪疫による死者の続出等様々な災難が農民を襲ったのである。これ等の大異変では村人たちが神の怒りとその恐ろしさに戦々恐々としたことだろう。

江戸時代中、後期には悪神の侵入を防ぎ旅人を守る道路の神として道祖神信仰が普及し村境や辻に競って造立されたのである。井細田村の道は足柄往還が唯一の街道であり道祖神は今井道、町田道が隣村へ通じる田圃路として街道から分岐する野中の辻に造られた。通行人や村の守り神としてその使命を果してきただ道祖神も都市景観の中では一隅に影をひそめ、街の交叉点では信号機や歩道橋がその肩代りとして通行人の安全を守り、人間の移動が歩行に限られていた江戸時代を思うとき今昔の感を深くするのである。

八幡神社沿いの道祖神は下(旧道)の大坂屋製粉と皆木米菓店の間にあったものが戦後敷地が氏子会の管理となり有料駐車場となったため現在地に移された。上、下に分れていた井細田の行政区画も戦後道路を基準とした若干の境界修正が行われ下が四十二区、上が四十三区となったので道祖神の所属も入れ替ってしまった。

道祖神は中国の旅人と旅の安全を守る道祖という神の名からつけられたと云うが原始的な信仰が幾多の変せんを経て神話の天孫降臨の先導をつとめた神猿田彦が結びつけられたり庚申、縁結び、子供を守る神とされたり仏教の影響を受けたものは双体像が僧形となっていて、また性器崇拜によりそれを象徴する陰陽石を道祖神として祭ることも多く双体像はその発展とも考えられている。私たちの子供の頃道祖神(賽の神)は身近な存在であつた。正月を迎えると子供たちは道祖神の前に太鼓を持ち出して祭ばやしを練習を始めたのである。太鼓の保管場所は公経堂(現在の井細田公民館の前身であり日蓮宗妙法講の御堂)であつた。締太鼓(小太鼓とも云う)は練習前に麻紐で太鼓の外周にある締め穴を通して皮を締め音を合わせるので下級生は一生懸命麻紐を引っ張ったものである。年代を振る返れば大正十二年の大震災から昭和十三年までの頃である。大正六年に出来た小田原紡績工場(略して小田紡)は大震災により崩壊、昭和十三年に富士フェイルム小田原工場が建設されるまでの間三万坪の敷地は廃墟となつていた。子供たちの年令も小学生から高等科二年生まで、学校は足柄村立尋常高等小学校(現在の小田原市立白山中学校)であり男子は坊主頭で服装は紺緋の着物に三尺帯を締め、下には白い長ズボンをはいて履物は朴歯の下駄かゴム靴(ゴム製の短靴)であつた。みずっぱを出している者もかなりいたが、そこには上級生も下級生もみんなして集まり鬼ごっこやかくれんぼ等遊びごとには事欠かないし上級生は何でも教えてくれた。

七草が過ぎると子供たちは各戸ごとに飾られていた門松を引摺りながら消防小屋裏の空き地に集結した。そこは水車小屋の東側にあたり、こゝから見渡す小田紡跡は荒涼とした原っぱであつた。

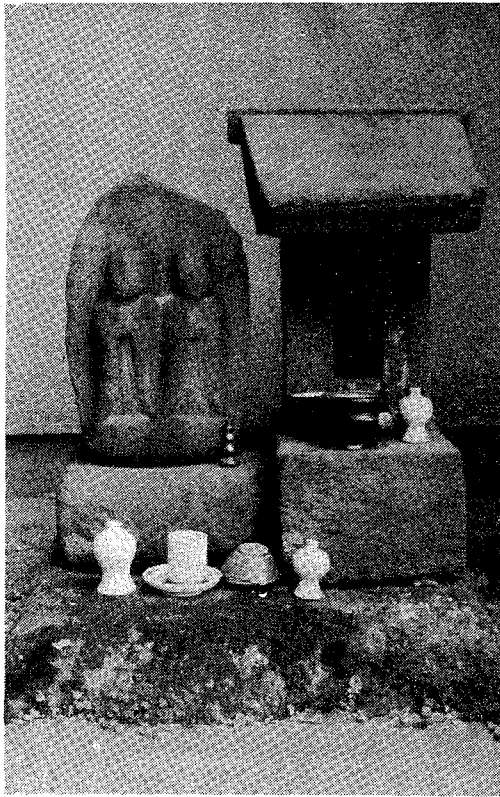
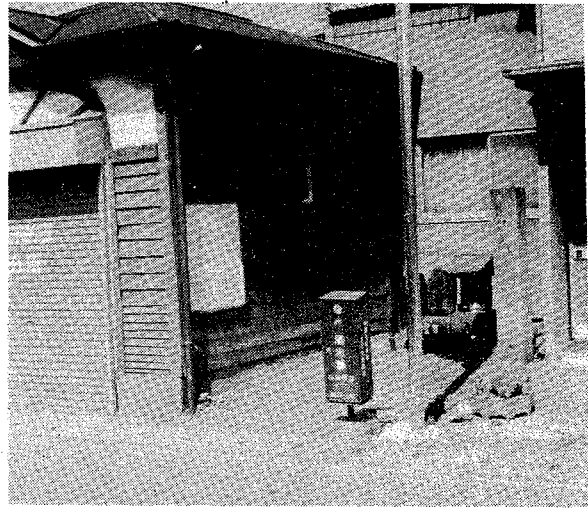
子供たちは鋸、鉈、小刀縄等を持ち寄り松小屋を組立てたのである。軒まで届く大きな松もあり上級生の指導で中央と四隅や中間には大きな松を立て枝をはらって逐次組合はせ縄で結んでいくと松小屋の恰好ができてくる。八畳位の広さであつた。

下級生は専ら松の運び屋であり、はらった枝の良さそうなものを探しては小刀で木刀作りをした。表皮を小刀で剥ぎ小枝の部分を鋸に仕立て二尺から三尺位の直刀や反りのある名刀?が出来たのである。

松小屋が完成すれば太鼓の練習も道祖神の前から移動して鎌倉やしうでん、はやし等の曲目を繰返し演奏した。暗闇の中でロソク(ろうそく)の灯が映しだす子供たちの動きには影絵のような余情が残されていた。十三日までは毎夜の練習を重ね下級生は太鼓を叩く順番が待ち遠しかった。それでも曲のメロディは全部覚え番を待つ間は頭の中で調子を合

わせていた。  
十四日は夕方から上、下の屋台巡行が始まるのであ

井細田の消防小屋

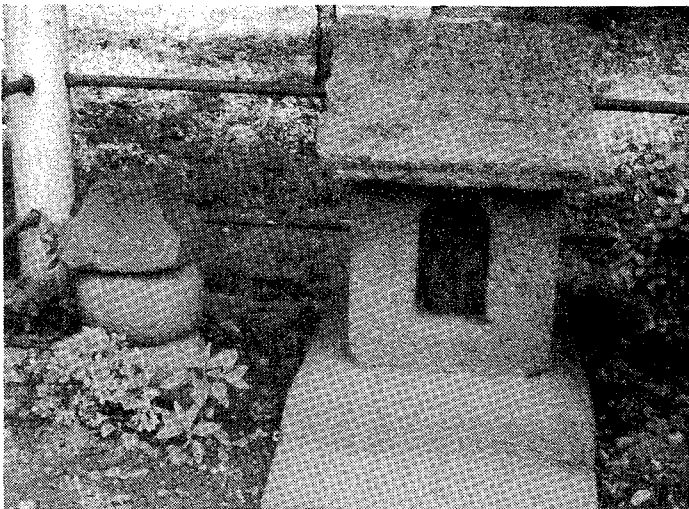


る。練習の成果というか私も一度だけ屋台の上で小太鼓を叩いた経験があるが、四段に連なる提灯にはローソクが点され笛や大洞、小太鼓、すり鉦等の音が繰りなすゆったりとしたテンポのはやしには哀愁が漂い屋台は夜の更けるまで足柄往還を巡行して夜祭のムード最高潮に達したのである。屋台は上よりも下の方が大きかった。現在八幡神社の秋祭に巡行する屋台は下の道祖神のものであり境内にある屋台小屋に格納されている。  
明けて一月十五日は道祖土払である。子供たちは松小屋を解体して現在の富士フィルムの守衛所附近の原っぱに積みあげた。  
各家では十四日の仏壇前に礮臼を据え上臼の孔に葉のない木の枝を立て、しん

上井細田の道祖神

粉(米粉)で大小のだんごを作って木にならし赤や青に着色したものもあれば繭玉や宝船等の細工を施したのもあった。  
道祖土払はだるまや縁起物、お札、しめかざりの外書道等一年間に起る家や村の災難を背負った道祖神を焼き燃やす火祭である。積みあげた松に火が付ければと子供たちは枝折りのだんごを持ち寄り焼きながら焦げたのを食べると風邪をひかない等という迷信

下井細田の道祖神



も小正月の習俗として懐かしいものであった。このようにして松納が終るのだが道祖神の祭事はすべて子供たちが主役であり行事を通じて厄祓ひがなされたのである。  
近在農家の人たちが大八車やリヤカーに積んで売りにきた門松も、戦後は農地解放による農業形態の変せんや開発の影響であろうか漸次に途絶え、クルマ社会を迎え門松を溝板の外側に立てると道路の見通しが悪

く歩行の危険となったため廃止され都市化が進んで道祖土払をする空き地もなくなった。  
戦争をはさんで生きてきた私たちには戦前と戦後の変貌が対比され松小屋造りから太鼓の練習、屋台巡行道祖土払等道祖神一連の行事は歴史の風化現象により世相変革の波間に消えたのである。  
小田筋以前の道祖神祭はどんな様子であったらうと近所の明治生れの古老に聞いてみたが記憶がないという。  
俳人の中村草田男さんは  
降る雪や  
明治は遠くなりけり  
という名句を詠まれ明治も遠くなったが素朴で愛らしい石像が町に残されている  
路傍の石仏には江戸の歴史がひそみ無病息災を神や仏に念じつつ日々過していたであろう祖先たちの面影が偲ばれ管て子供たちが打った祭太鼓も、近年民俗芸能の小田原ばやしとして多古の保存会の方々によって継承され最近では見知らぬ人たちが道祖神のまわりに出た雑草を取除き美しい野花を供えている光景を見受けるが道祖神信仰の再生を思うのである。(了)

昭和五十九年六月